‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

14号 1990.7.10
文・編集・発行
恋怪子

LIVE：ティラノザウルス 1990.6.15 渋谷ラ・ママ

ヴォーカルの人はのどの具合が悪かったらしいけど、気にならずに最後までできた。5月25日のときわ座のライブと同じように、キーボード、コーラス2人の3人の女性が入っていた。3人はヴォーカルやギターの人とちがってふつうの生身の人間のままでステージの上にいる。だけど、この日は演奏がすごくよくて、それにはもちろんキーボードもコーラスも入っているからなんだけど、生身の人間の存在に興和感はなかった。前半、ステージの上に、いままで感じたことのない緊迫感があって、とくにベースの人の存在感が強かった。でもギターの人はやっぱり凄くてギターを弾いているというより、ギターが勝手に怖しく鳴り響くのを抑えつけているっていうふうだった。
アンコールの一曲目、キーボードの美しい旋律ではじまり、歌になって、(心うたれる歌詞!)ギター、ベース、ドラムが入る。ギターの長い長い(時間にしたらそんなに長くなかったのだろうけれど、ほんとうに長く長く感じた)ソロのあいだ、私は死んでいくまでの孤独をここで、こんなギターをききながら埋めているんだ。そう感じていた。ティラノザウルスの音楽と、それによってひきおこされた心の風景とに彩られた時間を過せたことは、幸せ、といっていい。私にとっては、真実といえることも幻想といえることも、同じく美しく、崇高で、同じ重量で存在している。

この日のライブのあと、6月27日にラ・ママでティラノザウルスのライブがあったのだが、私は行かれなかった。7月3日にティラノザウルスのライブで知り合った真由美さんから手紙をもらった。

「ところで、27日のラ・ママですけれど、行きませんでした。しばらくティラノはお休みすることにしたんです。こうなった要因とゆうのはすごくいろいろあって、とても手紙だけでは書ききれないんですが…ずーっと行ける範囲内でがんばって来たけど、欠かさず行ってたせいか、以前のような"感動"ってゆうのかな? それがなくなって来ちゃったんですよね。去年12月は4回もティラノがあった訳ですが毎回すごく良かったんですよね。SEが終って「SWEET SOUL」に入る、あの瞬間、"これさえあれば何もいらない"って位、ドキドキして、キラキラして。ほんの数10センチ前、手を伸ばせば届くのにティラノは夢の中の人達みたいで。だけど、きっとデビューの話が進んでいるからだと思うんですが、どーも最近ビジネス的ライヴってゆう気がして。ちょっと昔のビデオでカリ坊が言ってたんですよね。"マグネシウムたいて…ってゆう派手なステージはヘビメタの奴がやってるから、俺達はイマジネーションをどれだけゴージャスにできるかってトコだ…ゴージャスさは物質ではない"って。自分でもよくわからないけど、ちょっと今は行きたくないんです。」

自分の心に正直で、いい手紙だと思う。
ずうっとひとつのバンドをききつづけてきて、次のライブに行く楽しみが感じられなくなってしまうことって、たしかにある。行きたい!っていう想いが湧いてこない。どんなに想いをかきたてようとしても、行きたくない!ってなっちゃう。バンドも動いているし、きく方も動いている。ある期間その両方が交差しているのだが、どちらも動いているもの、変化しているものだから、交差しなくなる時が来る。きく方は、先に進むには、すなわち次のライブに行くには、どうしても、いままでのもの=感動、を求める。やる方は、たぶん先に進むには、いままでのもの=演奏、じゃないものを求めるのだ。ステージと客席が手紙に書いてあるように数10センチしか離れていなくても、その間にはやる方ときく方の、お互い越えられないものがある。深くきくためには、きく方がステージのむこうに行ったらダメだし、いい演奏をするためには、客のことを気にしてはダメ。やる方は、何をどうやるかは自由。だけど客を選べないきく方はきたいバンドを選ぶのは自由。だけど何をどうしてほしいと要求はできない。お互いに越えられない、その間にあるものが音楽。音楽のなかでは、きく方もやる方も自由になれる。そして、それは貴いこと。その自由が感じられなくなったのなら、きくのをやめればいい。やる方は、やりたいことをやりたいように力いっぱいやればいい。それでいい。

LIVE：DEAD CRAW 1990.6.23 新宿アンティノック

2月18日に鹿鳴館でできたときちっともいいと思わなかったのに、この日はよかった。とくにギターがワイルドで、カッコよかった。客席の前の方でヘッドバンギングやってる子たちには笑っちゃったけどネ。

LIVE：ヘロインロッカーズ 1990.6.1 新宿アンティノック

熱が伝わってこないで、やっている人たちを見てたっていうだけ。ただ時間が過ぎたっていう感じ。きく側のなれあいを音楽で壊してほしい。

LIVE：ボイラーズ 1990.6.16 高円寺LAZY WAYS

1曲目と2曲目はよかったのだが、3曲目の「泥のいり」で歌にパワーがなくなってきて、ただの絶叫にきこえた。それからおわりまでパワーがないまま。ギターがよくて、ギターの方が歌っていた。

LIVE：TEAR DROPS 1990.6.2 吉祥寺バウスシアター

TEAR DROPSをはじめて見た。前半は気持ちがまとまらず、椅子に座ったり、立ったりしながらきいていた。山口富士夫が、なんかRCサクセションの清志郎みたいに感じられたり、シオンみたいに感じられたりした。それにギターの人も歌うのだが、かたくるしいし、サックスもあおりすぎにきこえる。ところが、後半になったら山口富士夫のヴォーカルと独特の雰囲気がステージ全体、演奏全体にいきわたってきて、それにひきこまれた。
TEAR DROPSから感じられたことは「ロックン・ロールって、なんでもありなんだ」ということ。山口富士夫は、その「なんでもあり」の「なんでも」をやってきて、現在は、うす目をあけているような、居眠りをしているような、そんなふうに生きているみたい。うす目でも見るものは見ているし居眠りをしていても、きくことはきいている。ときたま居眠りをやめて目をみひらくと、現在を射ぬく。「気をつけろ」(?)という歌をきいて、その視線の鋭さと、なんでもありをやった人が獲得できるやさしさを感じた。

7/26 20000Vのライブで活動停止とのこと。

LIVE：ボイラーズ 1990.6.13 高円寺20000V

ギターの音がなったとたんにズキッとくるものがあった。おわるまで何回も背すじを走るものがあった。曲と曲のあいだ、ライブハウスの中がシーンとしていた。踊ったり騒いだりがなくて、みんながききいっていた。きいているみんなの心がひとつになった時間があった。私はそのひとつになった大きなものを両手で抱いた。「BABY BLUES」でヴォーカルの人が「ブルースをぶつけてやる」と歌っていたが、ほんとうにブルースがぶつかってきた。ステージからこぶしがいくつも突き出されてきた。けれども、それは決して攻撃的じゃなかった。すごく自然な感じだった。叫ぶように歌っているんだけどちっとも無理にはきこえなかった。私はただステージから突き出されてくるものを受け入れていればよかった。ちっとも無理をしないですんだ。ヴォーカルの人、たぶん自分にむかって自然にうたいかけていたんだ。この日のライブ、毎日毎日何回もカレンダーを見ながら指をおって「あと何日」「あと何日」と待っていた。ライブのあと、この何週間かつづいていた不安定な心と体の不調から脱け出られたことを強く感じた。高熱を出したあとよく感じる解放感にも似た虚脱感があった。あきらめと孤独感がさらに深まった。そして、私の生命は私にとって大切なのではなくて、私が大切にしている人たちにとって大切なものなのだ、ということがわかった。

LIVE：DOOM 1990.6.24 目黒鹿鳴館

これまでのDOOMとくらべるのはよそう! この日の、この演奏をしているDOOMだけに心を集中しよう! こう決心させられた。だってメイクはしなくなったし、曲の感じだって全然ちがうんだもの。「どうだ、これで文句あるか!」ってケンカ売ってるみたい。買っちゃったよ、ケンカ。「よーし、わかった!」って。で、どうだったかというと、気にいりましたよ。コアなのに、ゆたかで。

LIVE：名前不明(関西のバンド) 1990.6.23 新宿アンティノック

前に出ていかないでうしろで立ってきいている人たちにむかって「オマエラ、ナニしに来とんじゃ」って文句をいったり、ウーロン茶のカンを投げつけたりして、サイテー! となりできいていた女の子が私に「あれ、自分がもどかしいからなんでしょうね」っていったけど、いえてる。

LIVE：縁ZZ(エニシーズ) 1990.6.16 高円寺LAZY WAYS

女4人のバンド。とてもよかった。今までの女のバンドは10以上みたがそのなかでいちばんよかった。ドラムがとってもよくて、ギターも目をみはるような感じ。ヴォーカルも歌に意味を感じさせる。自然な若さ、さわやかさ、真剣さがあった。4人がひとつのもの、音楽の生みだすものをちゃんと見つめてやっている感じがした。

LIVE：チン 1990.6.13 高円寺20000V

もしあの歌詞を書かれたもので読んだとしたらバカみたいに思えるかもしれないけど、歌になってきくとすごく深く重い。「GOOD MORNING」って歌で「朝はきらいだ。目をさまさなくてはならないから」っていうところがあった。とても印象に残った。

14号はゼーンブライブばっかり。記事の他によかった(6月の)LIVE：(ベスト5に選ぶ)
6/9 DAD BITCH 20000V 6/15 NOBS ラ・ママ 6/18 RIP VAN WINK ロフト
6/23 GENOAのヴォーカル兼ベース、WAR PIGSのドラム、とギターのセッション アンティノック